うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌
第23号
発 行 日：平成18年1月20日
編集発行：魚津埋没林博物館
印　　刷：魚 津 印 刷 （株）

美しくも珍奇な花

背の高い草に囲まれて、紫色の鮮やかな花が咲いています。でも、どこか変な感じがしませんか？ピントが合っていないのでわかりにくいですが、この花の茎を根元の方へたどっていくと、葉がついていないことに気づきます。この花の名は、ハマウツボといいます。ハマウツボは、自分で栄養を作らず、ヨモギの仲間に寄生して生きています。そのため、緑の葉を持っていないのです。写真でハマウツボのまわりに生えている草は、寄生されているオトコヨモギです。

ハマウツボは富山県では大変少なく、県の絶滅危惧種になっています。もし見つけたら、まわりのヨモギとともにそっと見守ってあげてください。

（2005年6月11日　魚津市内で撮影）

魚津の海岸　植物事情

学芸員　石須秀知

魚津市は富山県東部にあり、富山湾に面しています。海岸線は、北東の片貝川河口から南西の早月川河口までの延長およそ8キロメートル。富山県東部海岸は浸食が激しいことで知られ、魚津市もほぼ全域が人工護岸に守られた海岸線となっています。かつては広範囲に砂浜と松林が広がっていたようですが、現在の魚津市の海岸では、砂浜と呼べる場所は、北東端の片貝川河口付近の狭い範囲だけです。この砂浜も、ブロックを積み上げた離岸提と背後のコンクリートの堤防に守られています。また、南西端の早月川河口付近では、堤防の外側に砂ではなく石が堆積した浜が見られます。そのほかの海岸線はほぼすべて、コンクリート護岸と波消しブロックに波が打ち寄せる人工海岸で、部分的には離岸堤の効果で砂や石が堆積した場所もあります。

片貝川河口付近の砂浜

コンクリートの護岸

ところで、海岸、特に砂浜という場所は、植物たちの生育地としてどのような環境でしょうか。砂浜は、強い日射、乾燥、強風、塩分、砂の移動による埋没など、植物の生育にとって過酷な条件が重なります。そのため、砂浜ではそれらの条件に耐えられるように適応した植物たちが生育します。これら砂浜に適応した植物を海浜植物と呼びます。海浜植物は、背が低く、葉は厚く小さく、根や地下茎が長いなどの共通した特徴が見られます。魚津市で見られる代表的なものに、ハマニガナ、ウンラン、ハマゴウ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ハマエンドウ、オカヒジキ、コウボウムギ、コウボウシバなどがあります。

ハマヒルガオ

魚津市の海岸では、先に説明したように、砂浜はごくわずかで、ほとんどが人工的な護岸に守られています。魚津市の海浜植物は、砂浜のほか、砂や石が小規模に堆積した場所や、護岸のつぎ目、海岸に近い空き地や道路脇などにも点々と生育しています。このように、海浜植物にとってはあまり恵まれた場所ではない魚津の海岸ですが、テンキグサ、ハマゼリ、ハマアカザなど、富山県内での生育地が限られている希少な種類を見ることもあります。

ハマゼリ

一方、砂浜は、開けた土地を好む帰化植物も生育しやすい場所です。本来なら海浜植物の天下のはずの砂浜ですが、浸食を防ぐため離岸堤を設置した場所では、波や風の影響が抑えられ、やや安定した環境ができます。そのような場所では、オニウシノケグサ、ネズミムギ、ボウムギなどイネ科の帰化植物が多く生育しています。

また、砂浜以外の魚津の海岸では、ときどき「おや？」と思うような植物にも出会います。つぎの写真で、波消しブロックの上に生えているのは、ツルヨシという植物です。ツルヨシは、本来は河川の上流の、岩がごろごろしているような川岸に生育します。魚津市を流れる片貝川や早月川では、急流のため、河口の近くまで大きな石が多い川原になっていて、ツルヨシも上流だけでなく河口付近まで生育しています。そのため、付近の海岸にも風に乗って種子が運ばれ、本来の生育地と条件の似た波消しブロックの上で生育したと考えられます。これも魚津の海岸の特徴の一つといえるでしょう。

ブロックの上のツルヨシ

さて、ここでちょっと、海岸の植物たちの未来について考えて見ましょう。はじめに書いたように、魚津市周辺の海岸は、昔から浸食の激しい海岸として知られています。今のところ、離岸堤の設置などによって砂浜の浸食はある程度抑えられ、海浜植物の生育地はまだ残っています。しかし、先に書いたように、帰化植物との競争など、決して安泰とはいえない面もあります。さらに、50年後、100年後という長い目で見ると、温暖化という大きな問題があります。もしも温暖化によって海面の上昇がおきれば、海岸の植物にとって計り知れない影響をもたらすと考えられています。単純に考えても、海面が上がった分だけ砂浜の面積は縮小し、植物の生育地が少なくなります。植物たちは、海がせまった分だけ内陸側へ移動できればよいのですが、魚津の海岸のようなところでは、それは不可能です。こうした心配は、魚津だけの話ではなく、世界的な問題になります。

海岸という環境に適応した植物は、他の植物では耐えられない過酷な条件を克服した強さを持つ反面、海岸という場所でなければ、他の植物との競争に勝てない弱さをあわせ持っています。もし砂浜の消失という大きな変化が起きれば、白砂青松の美しい風景とともに、海辺に生きる多くの植物も消え去ってしまうかもしれないのです。

ウンラン

シリーズ

埋没林の仲間たち ㉒

ユリ科

ユリ科は、多くの植物を含む大きなグループです。従来ユリ科とされていた植物群をさらにいくつかの科に分ける見解もあり、かなり多様な植物を含んでいるようです。

ユリ科といえば、まず思い浮かべられるのは多彩な園芸植物でしょう。ユリ科には多くの園芸植物がありますが、特に科の名前にもなっているユリの仲間(ユリ属)は、色や形、香りなど数多くの品種があり、栽培が盛んです。魚津市でも、カノコユリが特産物として栽培され、市の花にも選定されています。

カノコユリ

もちろん、園芸植物ではない野生のユリもあります。富山県内の丘陵から山地では、ササユリにしばしば出会います。山歩きの途中でササユリの花に出会うと、足を止めて一休みするきっかけにもなります。そのほか、高い山にクルマユリ、山地の崖などにコオニユリ、平地にオニユリなどが見られます。

ササユリ

ユリ科(従来の分類による)には、ユリ属以外にも多数の植物があり、ちょっと考えただけでも、カタクリ、ニッコウキスゲ、チゴユリ、ツバメオモト、マイヅルソウ、クロユリ、シライトソウ、ショウジョウバカマ、キヌガサソウなど、山でおなじみの花が思い浮かびます。それぞれ美しく、あるいは趣のある花で、山歩きを楽しくさせてくれる面々です。

＊　＊　＊

現在の魚津市内では、平地から高山まで、60種類以上のユリ科植物が記録されています。

魚津埋没林では、平成元(1989)年の発掘調査でユリ科の花粉が検出されていますが、どの種類かは特定されていません。埋没林が生きていた当時、林の中には多くのユリ科植物が生育していたと思われます。

ご利用案内

○開館時間　午前9時～午後5時（入館は4時30分まで）
○休 館 日　12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始（4月～11月無休）
○入 館 料　・大人（高校生以上）・・・510円　・小中学生・・・250円
○交　　通　・ＪＲ北陸本線魚津駅・富山地方鉄道 新魚津駅 } 下車1.5km（タクシー・・・5分　徒　歩・・・25分）
・北陸自動車道魚津ICから3km車で10分

特別天然記念物　魚津埋没林博物館
〒937-0067 富山県魚津市釈迦堂8141（0765）22-1049
ホームページ　http://www.city.uozu.toyama.jp/nekkolnd/
e-mail　nekkolnd@city.uozu.toyama.jp/